



ライン
村上龍

むら かみりゆう
村上龍

平成14年4月25日 初版発行

発行者——見城徹

発行所——株式会社幻冬舎

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7

電話 03(5411)6222(営業)

03(5411)6211(編集)

振替00120-8-767643

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

装丁者——高橋雅之

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担で
お取替致します。小社宛にお送り下さい。
定価はカバーに表示してあります。

Printed in Japan © Ryu Murakami 2002



幻冬舎文庫

ISBN4-344-40231-6 C0193

ライン

村上 龍



幻冬舎文庫

ライン

目次

V o l. 10	V o l. 9	V o l. 8	V o l. 7	V o l. 6	V o l. 5	V o l. 4	V o l. 3	V o l. 2	V o l. 1	
ユウコ	則子	薫	明美	康子	小出	高山	ゆかり	順子	向井	
110	99	88	77	67	57	45	32	19	7	

「ライン」を抜けるゲート	あとがき	Vol.	Vol.	Vol.	Vol.	Vol.	Vol.	Vol.	Vol.	Vol.	Vol.
	244	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
田口ランディ		他人	ユウコ	杉野	チハル	美奈子	園田	ヨシキ	俊彦	フミ	幸司
			2								
		233	220	207	194	182	169	156	144	133	121

Vol. 1

向井

向井久雄は午後六時過ぎにその新宿副都心の高層ホテルにチェックインした。サングラスをして、会社や自宅にいるときは傾向の違うファッションをしてきたが、それでも誰に会うかわからないので、ロビーに入ってから、知っている人間がいなかどうか、あたりを見回した。

7 向井

向井は三十四歳で、スチル・フォト・ライブラリーに勤めている。それほど有名ではないカメラマンや、素人から写真を買い、著作権フリーにして、さまざまな媒体に売る会社である。会社のオーナーは四十代の女性で、名前は望月明子という。望月明子はまだフォト・ライブラリーが一般的ではない頃に、カメラマンだった夫の死を契機として、一人で会社を始

めた。まだ三十代に入ったばかりで、夫の住んでいた杉並の2DKのマンションがそのまま彼女のオフィスになった。

向井は、都内の私大生だった頃に、写真雑誌に小さく載っていた望月明子の「フォト買います」という広告を見て、オフィスを訪ねた。もう、十数年前のことだ。向井は平凡な私立大学文系の平凡な学生だったが、中学の頃からカメラをいじるのが好きで、写真雑誌のコンテストにいつも応募していた。セミプロのカメラマンだと自分のことを思っていた。

望月明子と初めて会ったときのことを向井はよく憶^{おぼ}えている。向井が持参した五十点近いポジと、百点近いモノクロの紙焼きを見て、違うのよね、と望月明子は言った。いい、とか、悪い、ではなく、違う、と言われて、向井は、違うってどういうことですか？ と彼女に聞いた。向井には自分なりの写真に対する思いがあったので、違う、と言われて、腹も立ったし、ショックでもあったのだ。

「才能がないとかひどい写真だと言っててるわけじゃないの、ただ、こういうのは、違うの、つまり、うちは、芸術写真は要らないんです、絵ハガキとかカレンダーに使えるような写真を扱うの、それもアートなポストカードじゃなくて、普通のポストカードだけだね」

それから向井は、雨に濡れたあじさいの花や、誰もいない公園や、横浜港の背景を撮って、望月明子のオフィスに持っていった。何点か、買ってもらえたが、卒業を前にして就職先が

決まっていなかった四年生の秋に、うちで働いてみない？　と言われた。

「普通の会社に入ってしまうと、なかなか写真とか撮れないでしょう？　うちだったら、そんなにバカ高いサラリーは出せないけど、その代わり、ずっと写真に囲まれてるわけだし、これはこれで将来性があると思うし、何より、わたしはムカイ君には写真を見る目があると思うのよ」

向井は、結局、望月明子のオフィスに入社した。写真を見る目があるという言われ方は、撮る才能はないという意味も含まれているようで少し不愉快だったが、当たっている、と思った。写真に囲まれているのは確かに楽しかったし、将来性があるという判断も正しかった。特に、八〇年代の終わりから九〇年代にかけて、バブル経済が崩れ、広告業界が有名なカメラマンの撮り下ろしを避けたがるようになってから、望月明子のオフィスは急に売り上げが伸び、画像処理のできるパソコンが出てからは、さらに大幅に需要が増えた。最初は向井一人だった社員も少しずつ増え始め、オフィスも南青山のマンションに移った。

四年前、オフィスが急成長を始める頃、向井は取引先の女性と結婚した。中堅の広告代理店のOLで、一歳下で、名前は長野真紀といった。望月明子は、結婚に反対したわけではなかったが、積極的に賛成もせず、マキちゃんには問題がある、と向井に何度か言った。向井にとって、ほとんど初めてと言っていい恋愛で、しかも長野真紀は連れて歩くとバーなど

で男達が振り向いて眺めるような派手な容姿の持ち主だった。ハネムーンはオーストラリアへ行つて、郊外のマンションをローンで買つて住んだ。

今年になつてからだ。もう耐えられない、と真紀が言いだした。向井は、月に一度の「遊び」がばれていたのかと最初は思った。向井は、昔、望月明子に注意されたことがあつて、それ以来、月に一度、風俗の女と遊ぶように自分で決めていた。

「ムカイ君はまじめなのは大いにけっこうなんだけど、何ていうのかな、まじめすぎると逆に不潔に映るものよ」

セックスについての話だった。望月明子の言うことは理解できた。向井はどちらかといえど内向的で、友達がすぐにできるといふタイプではなく、あらゆることに淡泊で、面倒臭がりだった。カメラやフィルムや印画紙に触れていればあとはどうでもいいところがあった。それで、月に一度、風俗の女と遊ぶようにしたのである。風俗の女は、不潔な男を嫌がるし、貧乏臭いファッションはバカにされる。向井は月に一度の「遊び」のおかげで、それまでより風呂に入る回数が多くなつたし、よく床屋にも行くようになったし、洋服のヴァリエーションも増えた。それに、女と話すのもうまくなつた。女と接するときには、リラックスしていなければいけないということを学んだわけだ。

最初の頃は、主にソーブランドやファッションヘルスを利用した。一ヶ月に二万から三万

の金を「遊び」のために用意するのは、フィルムや機材の購入を減らせばそう難しいことではなかった。それに望月明子は、かなりの額のサラリーをくれて、それはオフィスの成長に合わせ増額されていった。真紀と知り合った頃、つまりバブルが弾け画像処理のできるパソコンが普及しだしてオフィスが急に忙しくなった頃から、向井は「遊び」のグレードをアップさせた。シティホテルに一泊して、風俗から女を呼ぶようになったのだ。

結婚してからも「遊び」はやめなかった。真紀は、風俗の女達よりはるかに美しく、教養もあって、話題も広がった。ただ、どこか近寄り難いところがあって、どうしてこんな女が自分なんかとの結婚を望んだのだろうという思いが向井から消えることはなかった。

「マキちゃんには問題がある」

望月明子はそういう風に言っただけだったが、結婚してしばらくすると、いろいろなうわさが向井の耳に入ってきた。真紀はずっとある有名人の愛人で、最近捨てられたために、扱いやすい男を選んで結婚した、関西の資産家の長女である真紀は大学時代からある有名人と不倫関係にあったが、そのままだと遺産相続の際に不利なので一度清算し、どうでもいい男を探して結婚した、真紀はずっとある有名人の愛人で単にその相手の男にヤキモチを焼かせるために適当な男を見つけて結婚したが、未だにその有名人との関係は続いている……有名人が政治家や実業家に変わることもあったが、大体そういう内容だった。

知り合った頃、真紀は二十九歳で、仕事ができても美人の女に限って晩婚だったりするって本当なのかも知れないな、などと向井は思ったりしていた。真紀のうわさが耳に入り始めた頃、イタズラ電話が目立って増えだした。マンションに電話がかかってきて、向井が出ると、切れる。やがて、真紀は、自分専用の電話をもう一本引いて、その電話に向井が出ることを禁じた。真紀が関西の資産家の娘だということは事実で、向井とは別の銀行口座を持っていて、いつでも好きなときに洋服を買ったりした。

そういう結婚がうまくいくわけがないと望月明子をはじめとするまわりの友人達は思っていたようだが、向井は、結婚がうまくいくとはどういうことかわかっていなかったこともあり、真紀に対してある疑いをずっと抱きつつ、月に一度の「遊び」を続け、忙しくなった仕事をきちんとこなして、離婚は考えなかった。また真紀は知り合った当初から気が強く、口論になると常に主導権を握った。口論のきつかけも、必ず真紀が準備して、それに対する向井の対応はただひたすら耐えるというものだったが、一つだけ我慢できないテーマがあつて、それは向井と望月明子がデキている、というものだった。向井は望月明子を心から尊敬していたので、そういう疑いだけは許せなかった。

真紀は性格的にヒステリー症を帯びていて、言いがかり的な口論を仕掛けてくると、それは必ず何時間も続いた。望月明子には何度となく相談した。

「そういうのは困るわね」

「もう、慣れましたけどね」

「よく神経がもつわね」

「オレこういうの、生まれて初めてなんですよ」

「何が？」

「言い争ったりするの今までないんです、うちはオヤジもオフクロも、弟もおとなしいんで、もともとあまり話をする事もないし、だから初めのうちはね、元気のいい女だなんて思ってたんです、何となく活気があるなってね、今も、そういう思いは少しありますよ」

「まあ、わたしも実際にそういうマキちゃんを見てないから何とも言えないけど、よくわからない子だっているのは聞いてたのよ、本当に言いたいことは黙って隠して、どうでもいいことで妙に突っかかってくるところが昔からあった子だしね、カンが強いつていうか、要するに激しい子だね、いろいろわきもあるみたいだけど、結婚前にわたしが、問題があるって言ったのはそういうわきのことじゃないよ、それはムカイ君わかつてる？」

「わかつてます、うわきについても、オレにとってはいくくわからない世界だからなあ」

「よくわからないって？」

「金持ちとか、有名人って未知のことじゃないですか」

「気にならないの？　主婦のくせに、専用の電話引くなんてどう考えても普通じゃないけどね」

「オレとモチヅキさんのことを疑ってるって、どういうことなんですかね」

「ヤキモチだったら、ムカイ君への何らかの愛情があるってことだけど、どうなの？」

「どうって？」

「あなたのことがイヤでイヤでしようがなくて、ヒステリックに攻撃してくるって可能性だってあるのよ」

「よくわかんないですよ、もう」

「例の『遊び』、続けてるんでしょ？」

「ええ、それで何とかもってるって思うこともあるんですけどね」

「ばれたら大変じゃないの」

「ばれることはないと思うんです、いろいろ言うわりにはオレのことあまり興味ないみたいだし」

「いずれにしろ、考えたほうがいいよ、まともじゃないわよ、これから何があるかわかんないよ」

望月明子の言う通りだった。今年になって、真紀は、離婚を言いだした。理由を聞くと、

もう耐えられない、と繰り返すばかりでまったく要領を得ない。そのうち、弁護士が出てきて、向井はマンションを追い出されることになった。望月明子は、それはどう考えてもおかしいからといういろいろアドバイスをくれたが、向井には真紀や弁護士と争う気持ちは起こらなかった。ただ、真紀と離れて住むことのほうが辛かった。オフィスの傍に安いワンルームマンションを見つけて引越したが、一人暮らしを始めるとすぐに、老けたね、とみんなから言われた。まわりのうわさは、その有名人が真紀を取り返すことを決心した、夫とは別れるからまた昔のように付き合ってくれと真紀がその有名人に泣きついた、離婚しないともうお前となんか付き合わないとその有名人が真紀に言った、と例によっていろいろだった。

向井は何百回と真紀に電話をしたが、すぐに切れる。やがてその電話は取り外されてしまった。真紀の専用回線の電話番号を向井は知らされていなかった。別居して二ヶ月後に、望月明子の強い勧めで、向井も弁護士を雇った。現在は弁護士どうして慰謝料についての話し合いが行われているところだ。真紀の弁護士は法曹界ではかなり名の通った人物らしかった。向井の弁護士は、その奥さんの電話の相手や話の内容がわかればねえ、と何十回と洩らすような平凡な人間だった。勝ち目はない、と向井は思っていたが、別居が続くうちに、真紀は本当にいったい誰と電話してたんだろう、という強い興味が湧き上がってきた。それは、真紀という女は本当は何者だったのだろうという飢えに似た疑問だった。